

児童の理解の報告

広島文教大学教育学部教育学科

准教授 長 澤

希

1 はじめに

本科目は、小学校における児童の生活や学習の実態に即して、児童の発達・学びおよびその過程で生じるつまずき、その要因を把握するための原理や対応方法を考えることを目標としている。具体的には、児童理解から発達・学びを捉える原理や児童理解を深めるための教師の態度の基礎、観察・記録の意義、観察法の基礎、個と集団の関係や人間関係、その他の背景から児童のつまずきを理解することについて、講義やグループワーク、現場の短期見学などを通して理解する。

2 実施のスケジュール

全15回の授業実施内容は以下の通りである。なお、本授業は1時間（実時間45分）であるが、学外で現地実習を行う第5回、第9回については45分を超える。また、本科目は「幼児の理解」、「生徒の理解」と合同で授業を実施する機会を設けている。以下の表の授業形態に示す「合同（3会場）」とは、幼児・児童・生徒の理解の受講者が3会場において同一画面をTeams配信で共有することにより、合同で授業を実施したことを示す。

表1 「児童の理解」授業実施スケジュール

回	月日	曜日コマ	内容	授業形態
第1回	令和4年9月29日	木3コマ	ガイダンス	合同（3会場）
第2回	令和4年10月6日	木3コマ	子ども理解の意義	合同（3会場）
第3回	令和4年10月13日	木3コマ	現地実習の心がまえ・諸注意	合同（3会場） ⇒科目別
第4回	令和4年10月20日	木3コマ	観察の目的	合同（3会場） ⇒科目別
第5回	令和4年10月24日、 25日、27日、28日	月火木金 各日午後	現地実習①児童クラブ	科目別
第6回	令和4年11月10日	木3コマ	観察記録に基づいた討議	科目別
第7回			エピソード記録の書き方	科目別
第8回	令和4年11月17日	木3コマ	エピソード記録に基づいた討議/ 実習直前指導	科目別
第9回	令和4年11月30日	水午後	現地実習②小学校	科目別
第10回	令和4年12月8日	木3コマ	観察記録およびエピソード記録に 基づいた討議と発表	科目別
第11回				
第12回	令和5年1月12日	木3コマ	校種間交流会	合同（各会場）
第13回				
第14回	令和5年1月19日	木3コマ	総括（合同）	合同（3会場）
第15回	令和5年1月26日	木3コマ	総括（各科目）	科目別

3 活動の概要

第5回と第12回に実施した現地実習についての詳細を述べる。

(1) 現地実習①_放課後児童クラブでの実習

1回目の現地実習では、大学近隣にある3つの児童クラブ（可部南児童クラブ・可部児童クラブ・倉掛児童クラブ）において、半日の実地実習を実施した。

(2) 現地実習②_小学校での観察実習

2回目の現地実習では、現地実習①の3つの児童クラブに隣接している3つの小学校（可部南小学校・可部小学校・倉掛小学校）において、半日の観察実習を実施した。

表2 現地実習① 児童クラブの実習日程

10月24日（月） 25日（火） 27日（木） 28日（金）	可部南児童館 24日8名/25日8名 27日8名/28日9名 計35名	可部児童館 24日10名/25日10名 27日10名/28日10名 計40名	倉掛児童館 24日5名/25日5名 27日5名/28日5名 計20名
実習内容 学生の動き	13:30 現地集合 13:30～17:15実習 17:15～17:30反省会 17:30 終了	13:30 現地集合 13:30～17:15実習 17:15～17:30反省会 17:30 終了	13:10 現地集合 13:10～17:00実習 17:00～17:15反省会 17:15 終了

表3 現地実習② 小学校での実習日程

11月30日（水）	可部南小学校 計35名	可部小学校 計40名	倉掛小学校 計20名
引率教員	長澤 希	佐伯 育郎	三田 幸司
実習内容 学生の動き	13:25 現地集合 13:30 始めの挨拶 13:40～14:25 5校時 14:30～15:15 6校時 15:15～帰りの会 15:35～終わりの挨拶 16:00 終了	13:25 現地集合 13:30 始めの挨拶 13:45～14:30 5校時 14:35～15:20 6校時 15:20～帰りの会 15:40～終わりの挨拶 16:00 終了	13:25 現地集合 13:30 始めの挨拶 13:45～14:30 5校時 14:35～15:20 6校時 15:20～帰りの会 15:40～終わりの挨拶 16:00 終了

4 成果と課題

(1) 「つなぐ」教育

本科目の特色は、「幼児の理解」および「生徒の理解」の受講者とともに学びを共有する機会を設けていることである。幼稚園・児童クラブ・小学校・中学校へそれぞれ実習に行った学生が協働的に学ぶことで、学生同士が専攻を超えてつながる。また、校種間の学びをつなげる。これらは、本学が目指す「つなぐ」教育の基礎となる学生の姿であったと考える。また、毎時間の学生のふりかえりを通して、本科目の意義を再確認することができたことも成果の1つとして大きい。学生のふりかえりを一部紹介する。

- ・教育者になってから子供の様子や教科間・校種間での連携が今後必要になってくると言われているのでこのような共有できる機会はかなり大切になると思いました。それぞれが見てきた姿から何を学んだのか、何が良くて何を正すべきだったのかというのを共有することで自分もその気づきから学ぶことが出来ます。とてもいい事だと思いました。
- ・他の学校の観察に行った人に話を聞いたり何をしたかどのようなことがあったかなどを聞いたりしたことで自分達ができていなかったことを発見することができました。

(2) 教育現場と大学とを「つなぐ」ために

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、教育現場の状況も激変した。また、教員不足により教員1人ひとりの負担が大きくなっているという話を多方面から耳にするようになった。そのため、大人数の学生を教育現場が受け入れること自体も容易なことではない。本年度の実習先である3つの児童クラブおよび小学校は、令和3年度から新たな実習先として開拓し、本年度は2年目となる。教育現場の負担を考慮するとこの度の半日の実習で精一杯であった。半日の実習で学生がいかに「子ども理解」を深めることができたのか、という点においては不安が残る。また、児童クラブにおいても、職員不足が昨今の顕著な課題である。ただ、児童クラブでは実際に学生がすぐに戦力になり得るという点において、学生を非常に好意的に受け入れてくださった。学生の中には、児童クラブでの実習後に実際に実習先でアルバイトを始めた者もある。このように、教育現場と大学のニーズや目的が繋がると、実習がさらに充実していく。今後はさらに、大学教員と教育現場の教員との連携の在り方を模索していかなければならない。また、大学が内外とのつながりを一層深めることで、実践力のある教員の養成を実現したい。